いま伝えたい
――被爆者から

〈28〉 署名を力に核兵器廃絶へ

長野支部紅花班　今井和子さん（76）

閃光と爆風

1945年8月6日、爆心地から2キロメートルの広島の自宅の縁側で被爆しました。私は5歳でした。ピカッと激しい閃光が走り、地響きのような爆音やものすごい風が巻き起こり、何かが音を立てて飛び散る様は暗闇の嵐のようでした。しばらくして見えてきたものは、崩れそうにゆがんだ家の中に敷き詰められたガラスの破片、吹き飛ばされた畳、散乱した家具でした。何が起こったか、まったく分からないまま隣の家が火を噴いて燃えていたので、自宅に居た祖母、母、私の三人は家を飛び出しました。

「Tさんは、祖父の調査を最後に白血病で亡くなられました。残念です」と今井さん

焼けただれた街

私たちは、知人の家に向かいました。家族の集合場所と決められていたところです。街の中は建物が倒壊し、炎上はどこまでも続いていました。市街地を抜けて田舎道に入ると、大勢の人が前へ前へと歩いていました。そこへ、ゆっくりと馬車が通り、荷台にはけが人、やけどの人が折り重なるように乗っていました。急に空が暗くなり大粒の雨が降り出しましたが、みんな濡れながら歩き続けました。これが、放射性物質を含んだ黒い雨だったのです。

知人の家にたどり着き、中学校の教員をしていた祖父を待ちましたが、一日たってもきません。母は私を知人に預け、6キロメートルの道を往復し、焼けただれた街の中で祖父を探し続けました。黒焦げの遺体の山の中に祖父らしい人があると、口を開けて、祖父の特徴だった金歯を確かめたそうです。1週間探しても手掛かりはなく、祖父は遺体も遺骨もない行方不明者となりました。私たち家族は祖父の死を認め、「原爆」を心の奥に封じ込めてしまいました。

広島を離れて再出発をしましたが、母の身体は放射能にむしばまれていました。髪の毛は抜け、傷口は治らず、歯茎から血の塊が出て、いつも臥せっていました。晩年は甲状腺機能障害から心房細動、脳梗塞（のうこうそく）で寝たきりの状態となりました。

奪われた若い命

行方不明だった祖父に何が起こったかを知ったのは、60年後のことでした。祖父とは別の作業現場でトラックの陰にいて奇跡的に助かった卒業生のTさん（当時中学1年生）や学校の協力で、わかったのです。爆心地から500メートルの川沿いにある旅館の取り壊し作業中に、35人の生徒と一緒に被爆死していました。祖父は即死状態だったとのこと。13歳から15歳の生徒たちは、「お父さん、お母さん」と呼びながら亡くなったそうです。断ち切られてしまった、痛ましく悲しい10代の生涯。このようにして奪われた若い命は祖父の学校で512人、広島市全体で7000人ということです。

私たちは、戦争の犠牲者と未来を生きる人たちのために平和を守る責任があります。今できることは、核兵器廃絶を訴える「ヒバクシャ国際署名」の輪を大きく広げることです。核兵器がゼロになった時、初めて世界が平和問題を平等に考えることができます。一人ひとりの願いを込めた署名が集まり、国連本部近くのハマーショルド広場に高く高く積み上げられて世界を動かす日が必ずくるでしょう。核兵器禁止条約交渉もいよいよ始まります。反対する日本政府の態度を変えるために、がんばっていきましょう。